

ドイツの経営経済学会第77回年次大会は、2015年5月27日(水)～29日(金)、ウィーン経済大学(Wirtschaftsuniversität Wien, WU)で開催された。ウィーン経済大学では、1998年に年次大会が開催され、それ以来だが、今回は旧市街の旧キャンパスだったのが、今度は数年前に郊外のプラーター遊園地の横にできた、非常に斬新な建築で知られる新キャンパスであった。今大会は、日本からの参加者は、ドイツでサバティカル中の香川大学の柴田明教授、関西学院大学の深山明教授、そして筆者の計3人であった。

統一テーマは「経営経済学における研究と教育の統一(Einheit von Forschung und Lehre der BWL)」で、「up-to-dateかobsoleteか?」という副題がついている。基調講演はデューク大学のシトキン教授で、活動のゴールの設定にあたり、それを高く設定することによって効果がある、という趣旨であった。話の中で、大学での教育における様々な手段、テーマとしての研究と教育の対応についてのノウハウなどが紹介されていたが、同じことがドイツ、あるいはさらに日本でも可能なのだろうか。筆者の勉強不足もあると思うが、アメリカの大学での教育は、やはり独自の(優れた)方法があると思うし、ドイツや日本の大学、あるいは大学教員にとってそれは「話」としては参考になっても実務的に使えるかどうかは、また別の話ではないか、というのがホンネであった。ただ、毎年統一論題のスピーカーには、ほとんど必ずアメリカ人の教授が招かれ、英語による講演が行われていることは注目すべきであろう。

他にも、個別テーマの発表にいくつか参加したが、例年通り、筆者が会場に行くと必ず発表者が近付いてきて「ドイツ語は分かるか?」と聞かれた。プログラム上は英語であるが、実際の発表・討論はすべてドイツ語で行われるからである。これは、テーマが英米関係のものである時も変わらない。

今年の発表で興味深かったのは、ドイツの研究雑誌の編集者たちによる、投稿論文の検討である。ドイツ人の研究者たちによる(英語)論文の投稿は年々増えており、アメリカの雑誌との比較は確かに重要であろう。そして、実態としては、アメリカの研究雑誌に投稿された論文の評価が明らかに高いのである。

来年は5月18日から20日までミュンヘン工科大学、再来年はマグデブルグ大学、その次はロシュトック大学ということになっている。再来年から2年間、旧東ドイツの大学で、しかも年次大会は共に初めての開催となる大学で年次大会が行われるのは興味深い。また、来年の統一テーマが The Role of Entrepreneurs, Corporations and Technology in Innovation –Opportunities for Business Research と初めて英語になったことも注目すべきであろう。